

都市経営研究科 都市政策・地域経済コース ワークショップI 講演記録

日時 2020年6月12日(金)

テーマ 不動産業から地域の未来を考える ～アートを切り口とする地域活性化の試み

講師 木坂 葵 氏

千島土地株式会社 地域創生・社会貢献事業部 一般社団法人おおさか創造千島財団 事務局長

### 木坂氏が提示した講義のポイント

- ・人口減少、空き家の増加などの地域の課題がどのように芸術活動と結びついていくのか？
- ・北加賀屋にどんな変化が起こったか？
- ・まちは誰がつくるのか？

### 北加賀屋というまちと千島土地について

大阪市住之江区の大阪湾へと繋がる木津川河口付近に広がるまちである。一帯は古くから造船業が栄えていたが、船の大型化とともに北加賀屋から離れていく。千島土地は名村造船所に戦前より土地を貸していたが1988年に建造物を残したまま返却された。造船所跡地は工業専用地域で制限が多くあり活用方法を模索していた。

### 不動産業の千島土地が芸術活動支援へ

2004年舞台プロデューサーとの出会いから、芸術・文化の発信地として活用する取り組みが始まった。アート関係者に名村造船所跡地を30年間無償提供と発表し話題となる。30年にわたり新しい芸術の提示・考察・検証・記録を行うアートプロジェクト「NAMURA ART MEETING '04-'34」がスタート。翌年には同跡地をアート複合スペース「クリエイティブセンター大阪 (CCO)」として開設。ライブスタジオ、イベントホール、屋外スペースなどで構成され、以降北加賀屋エリアのイベント拠点として活用されていく。

### 人口減少、空き家の増加などの地域の課題と芸術活動

全国的な問題でもあるが、大阪の各地、北加賀屋も空き家が増加傾向である。今後人口減少とともに空き家率は加速する。アーティスト支援の一環として、千島土地が所有する北加賀屋に点在する空き家、空き物件を現状復旧なしの条件で、アーティストやクリエイターがアトリエ、オフィスとして使えるように格安で貸し出す事業を2009年に「北加賀屋クリエイティブ・ビレッジ構想」として発表。芸術・文化が集積する創造拠点を目指し、現在50カ所の拠点がある。AIR大阪(2008年～)、コーポ北加賀屋(2009年～)、隠れ屋1632(2011年～)など。

## 直接的な芸術支援以外にも地域コミュニティ活性化の取り組みを開始

ライフスタイルの変化により 1997 年をピークに利用者数が減少に転じた駐車場経営の依存からの脱却を目指し、アート以外のクリエイティブな活動の支援や、地域コミュニティの活性化も取り組み始める。北加賀屋クリエイティブ・ファーム (2012 年)、みんなのうえん 第 2 農園 (2013 年)、MASK (2014 年)、APartMENT (2016 年)、千鳥文化 (2017 年)、KITAKAGAYA FLEA @CCO (2016 年～)、ウォールアート (2017 年～) など。

## 近年の活動

大阪在住の著名な現代芸術家である森村泰昌氏から倉庫を探していると依頼があったことがきっかけで、氏が北加賀屋の土地と中古物件が気に入り 2018 年に M@M (モリムラ@ミュージアム) に発展した。

コロナ禍の影響も心配されたが 2020 年 6 月に Super Studio Kitakagaya をオープン。アーティストやクリエイターが共同スペースで互いの活動に刺激を受けながらつくりつづけることができる環境を提供、作業風景を見せられる空間となっている。

## 北加賀屋にどんな変化が起こったか

北加賀屋エリアがブランディングされ、文化の担い手となりうる若い世代の人々が多く集まるエリアとなった。具体的には以下のとおりである。

- ・「クリエイティブセンター大阪 (CCO)」の開設で北加賀屋への若者の来訪者が増加した。空き家が減少し、若い世代のクリエイターたちが転入してきた。
- ・全国のアート・まちづくり関係者への認知によりから、「大阪のアートスポット」「ウォールアートのまち」として一般層にも普及しつつある。
- ・区役所を中心とした、アートによる地域活性化の取り組みが始まった。

## まちは誰がつくるのか

冒頭の木坂氏が提示した講義のポイントにあったこの問いは、レクチャー中に明確には示されなかったため筆者の言葉で書きたいと思う。

つくるのはもちろんその土地に住む人々であるが、まちが生き続けるためには、住む人々が土地に愛着を持って住みつづけ、世代が緩やかに移り変わって継続させていくことが重要である。現社会においてはこの当たり前のことが難しくなりつつある。千鳥土地の活動は、アートを中心とした文化形成や、まちに愛着をもてる地域コミュニティづくりに寄与しており、地域にとって貴重な存在である。コロナ禍以降、コミュニティ概念等が変わり方針転換がせまられるかも知れないが、千鳥土地の活動には今後も期待したい。